

「御霊の剣、すなわち神のことば」

エペソ人への手紙 6 : 11 - 17

September.27.2026

エペソ人への手紙 6 : 11 - 17 (パウロ)

Preface

久しぶりのエペソ書になります。

前回まで、神のすべての武具を身に着けることについて見て参りましたが、今日から数回に渡って、最後の武具であり 6 つの目の武具である、「御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい」という御言葉について考えて行きたいと思っております。

神のことばである聖書配布の働きを 1 年に 1 回分かち合うギデオン礼拝の日丁度重なったのも、神の導きかなと思っております。

これまで学んで来ました神の武具は、敵の攻撃から身を守るいわゆる防具でしたが、最後の武具・御霊の剣は、唯一、身を守ること以上に、攻撃的な、攻撃を仕掛けていくための武器であることが目を引きます。

もし、御霊の剣を手にししないで世を生きるならば、または信仰生活を生きることは、肝心要の唯一の攻撃を担う武具を身に着けることなく、熾烈な戦場に身を投じることと同じような状態になることなんだと思います。

御霊の剣と言った時、特に目を引きますのは、胸を焦がすかのような熱い感動とか、心の底から沸き立つ喜びや、異言とか、情熱的な賛美とかではなく、「神のことば」であるということです。

聖書の言葉そのものが、御霊の剣だと言うのです。

「聖霊」とか、「御霊」と言いますと、何かこう感情的な高ぶりや超常現象のようなものを連想するかもしれませんが、それ以上に、冷静沈着な静かな戦いである御言葉を読み、御言葉を食し、御言葉を黙想しながら、聖書の御言葉を我が血とし我が肉とするということに、「聖霊」の名が用いられていること、このことに、私たち読者は大いに注目する必要があるのではないかと思います。

Part One

もしかしめすと、「聖霊・御霊」と言いますと、聖書の言葉とは別に、または離れた、もしくは超えた何か特別な体験や奇跡、感情を底から揺り動かす熱い感動のようなものばかりを思い浮かべてしまいがちかもしれませんが（私自身かつてそう思っていたように思いますが）、聖霊様がこの地に来られてなさる最も大きなお働き、重要な任務と言いましょうか、第一の使命が何かとイエス様をご説明なさっている聖書箇所があります。

ヨハネの福音書 14 : 26 です。

ヨハネの福音書 14 : 26 (パウロ)

聖霊なる神様の第一のお働きは、私たちに、えも言われぬ感動をお与えになるとか、心を熱くするとか、異言や預言を与えると、感情を高ぶらせ喜びでいっぱいにするとかではなく、もちろん、副産物としてそれらが伴うと思いますが、イエス様が話されたすべてのお言葉、聖書のことば、新約聖書・旧約聖書に記録されている内容・言葉を私たちに思い起こさせ、教え、確信づけること、そのお働きこそが、聖霊様の最も大事な働きだと、イエス様仰います。

ただ聖書を読むのではなく、ただ聖書を読んだ時間を取ったということに満足するのではなく、聖書の御言葉が私のたましいに根を下ろす、関節と骨髄を刺し貫く程に従いたい、従わずにはいられない、「そうだ」と、「その通りです」と、たましいの底から同意できる「アーメン」と言えるように導くこと、これが、聖霊なる神様の第一のお働きであり、私たちが身に着ける御霊の剣です。

御霊の剣を身に着けるとは、我が内の中で、神のことばが幾千もの金銀にまさるものとして根付くことだと思いますが、神のことばが根付くとは何でしょうか？

ヨハネの福音書 16 : 13－14 (パウロ)

御霊なる神様は、父なる神、御子なるイエス様の言葉のすべてを私たちの中でお語りになり、私たちを真理へと導いて下さいます。

つまり、神のことばが私たちの中に根付くとは、真理が根付くことです。

何が本物で何が偽物なのか、何が事実で何が偽りなのかを知れるようになるというのです。

サタン悪魔が、何をもって、何についていつも私たちに戦いを仕掛けて来るのかと言いますと、真理についてです。

サタン悪魔は、うそや偽りをもって私たちをそそのかし、うそや偽りに引きずり込もうと、けしかけて来ます。

それに対抗するためには、何が事実で何が偽りなのか、何がうわべで何が本質なのか、何が本当で何が嘘なのか、何が真理なのかを知らなければなりません。

私という人がどれだけ発奮し、一生懸命で、意気込みがあるのかの問題ではなく、どこに立っているのか、立っている土台が堅固な岩でなければならないということです。

空虚な所にただ浮かんでいるのでもなく、砂の上に家を建てるようでもなく、神のことばを土台として立っているのか、立っていないのかの戦いです。

Part Two

ヨハネの福音書 8 章を見ますと、あたかも砂の上に家を建てているかのよう

だけれども、それを指摘されても認めようとしない人々のイエス様との押し問答の様子が記録されています。

ヨハネの福音書 8：21－24（パワポ）

ちょっと分かりにくいかもしれませんが、イエス様は何度も、「あなたがたは、自分の罪の中で死にます」と仰りながら、「あなたがた自身先ず、神の前にあって罪人であることを覚え、他の誰でもない自分たち自身の罪の中で死に行く者であることを認めること」の重要性を語っておられます。

聖書が「罪人」と言った時のその意味は、神に反し、神を知らず、神の目にかなわない、神の嫌う道を選び、神の目に悪を行う人ということです。

そんな罪人のことをイエス様は、「盲人が盲人を導いているようだ」と、「心のたましいの目が盲目であるようだ」と仰ったことがありました。

真理を知らない者、何が偽りなのかを知らない者、永遠のいのちがあり永遠の滅びがあることを知らない者、創造主なる神がおられることを知らず、その神なるお方が私たち人間の生死禍福を主管しておられることを知らず、見えず、何をすれば祝福が臨むのかを知らず、何をしたらのろいが臨むのかを知らないたましいにおける盲目が、罪人だと言います。

さらには、知らない見えないからなのか、頑なで、頑固です。

自分が正しいと固執します。

そんな頑なな罪人に対してイエス様は、「あなたがたは真理を知らず、あなたが正しいと主張するものの科で死ぬことになってしまいます。でも、私を真に信じる者は違う道を進むのです」と言われます。

正にこの地点が、サタン悪魔との戦場であり、その戦いの最も重要な要点にもなるのだと思います。

もう少し、ヨハネの福音書 8 章を読み進めてみます。

ヨハネの福音書 8：31－47（パワポ）

今この言葉を誰に言っているのかと言いますと、31節で「イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた」とある通り、イエス様を信じていると自覚している人たちにです。

イエス様を信じていると自覚している人たちが、イエス様から見ると、あたかも、たましいの盲人であるかのように、神のことばに聞き従わず、サタン悪魔の言葉に聞き従っているようだというのです。

そして実際に、イエス様を信じたこの人々が、イエス様を悪魔の導きに従って十字架に架けて殺しました。

私たちももしかしますと、毎日、神のことばでなく、悪魔の声に聞き従ってイエス様を十字架に架けて殺しているようなことになっているのかもしれない

ん。

いや、たぶん、確実にそうなのでしょう。

だから、御霊の剣、すなわち神のことばを取らなければならないのでしょう。

私が尊敬する牧師先生の一人に、ジョン・パイパーという牧師がいらっしゃるのですが、全世界がコロナ禍で苦しんでいる時には、直ぐに聖書の御言葉からその事態をどうとらえていくべきかを記した「コロナウィルスとキリスト」という本を出版されたりした方でもあるので、ご存じの方もいらっしゃるかと思います。

このジョン・パイパー牧師が、こんなことをメッセージの中でおっしゃっていたことがありました。

「私はすべてのことと戦っています。私は毎日、聖書を読むことと戦っています。私は毎日、主にある喜びのために戦っています。私は毎日、祈るか祈らないかのために戦っています。私は毎日、この世界にあって聖なる者であろうと戦っています。そしてそれは、決して簡単なことではありません。」

私にとって、この言葉は衝撃でした。

こんなにすごい牧師で、神学者で、説教者である方も、毎日聖書を読むのか読まないのかの戦いをしている、毎日祈るか祈らないかの戦いをしている、毎日聖なる者であるかどうかを戦っている。

ボディブローのようにじわじわと効いてくる、冷静沈着な力となって、心に迫ってきました。

Part Three

サタンは、私たちと戦う時、うそ偽りを持って戦います。

絶え間なく、休むことなく、上手い具合に神のことばを歪曲させてだまそうとします。

その最も代表的な例が、創世記に記されているように思いますが、人類の祖先アダムとエバは、何をもって墮落したのでしょうか？

サタン悪魔が、アダムとエバに近づき、こんな言葉を掛けました。

「神が本当に、園のどの木からも食べてはならないと言いましたか？ いや、そんなことはないでしょう。食べても大丈夫ですよ。食べたところで、直ぐに死ぬことはありませんから」と事実のよううそをもってそそのかし、扇動し、言葉を巧みに変えながら、神のことばを捻じ曲げたうそ偽りを人の心へ浸透させていきました。

サタン悪魔との戦いは、初めからこの戦いです。

「食べると死ぬのかい？ 食べても死なないよ」という戦いです。

神のことばが本当なのか、サタン悪魔の言葉が本当なのかの戦いです。

すべての戦いは、結局、「私たちがどうすることが本当なのか」の戦いなのだと思います。

何が本当の祝福で、何が本当に神様が忌み嫌われることで、何が神のことば

に沿うことなのか、神がいるのかいないのかという真理、事実の戦いになります。

神がいると信じている生き方を選び取っているのか選び取っていないのか、神を信じている風なのか真に神を信じているのかの戦いです。

御霊の剣である神のことばを取るか取らないかは、行き着くところ、神がいるのかいないのかの戦いになるのでしょうか。

どんなに神を信じ、キリストを信じ、神を礼拝したとしても、神のことばを取る戦いに挑まないならば、それは、神を否定することになるのだと思います。

サタン悪魔は、神様が真理で事実でないかのようにだましました。

アダムとエバに神様に対する不振を抱かせるために、「神様があなたたちに不公平なことをなさったのだ」と、「あなたがたがあれを食べると、神を彷彿させるような対等するような存在になってしまうから、神は、あなたがたにあれを不公平にも食べさせないようにしているのですよ」と語り、「そうだったのか！ならば神のような存在になろう」とアダムとエバはただちに食べ、エデンの園から追放されてしまいました。

今日においても、私たちの信仰生活において起こる問題、サタン悪魔の攻撃を受けるのは、例外なくこのところなんだと思います。

神様が「やってはいけないよ」と仰ることが、目に慕わしく、好ましく、魅力的に感じます。

それをすることが、やってのけることがかっこよく見え、優れているように良いようにも思えてきます。

聖書の御言葉が「やってはいけないよ」と言うことほど、かっこよく見えたり、美味しそうに見えたりします。

実に変なと言いましょか、不思議なことです。

以前の私がそうでしたが、神を信じている人が、アホに思えました。

自分一人で生きることの出来ない弱い人たちで、みじめな人たちで、何かに束縛されている人たちだと思っていました。

「死んで来世があるならば、堂々と地獄に行くし、死んだら地獄に行くかもしれないと恐れながら神を信じるなんて、俺はいいよ。俺は自分を信じて、自分の力だけで立派に生きてみるよ」という具合でしょうか。

神をイエス様を信じている人が、みみっちく見えて、度量が小さく見えます。でも、これこそが、サタン悪魔のトリックであり、ペテンです。

例えば、燃えるガスコンロの上に30分間手を置き続けながら、「うんな火傷するからって、これぐらいも耐えられないで手を引っ込めるなんて、弱虫のやることだよ」というぐらい愚かな騙し事で、実際に、誰もガスコンロの上に手を置き続けるなんてことはしませんが、これが「神」とか「信仰」のこととなると、それと同じようなことをしてしまいます。

まんまと騙されてしまいます。 本当におかしなことです。

神様を熱心に信じ、イエス様を愛していることが、おかしいことのように映ってしまいます。

先程読んだヨハネの福音書 8 : 43 を見ますと、

ヨハネの福音書 8 : 43 (パワポ)

とありますが、イエス様を信じるという人たちの最も大きな病は、イエス様を信じているとは言うものの、イエス様の言葉が聞けない、分からない、聞き従えないということなのかもしれません。

神の言葉よりも、サタンの言葉によく聞き、従っているのかもしれないと言うのです。

今ここに登場してきますイエスを信じる者たち含め、イエス様を信じる者たちが誰の言葉をよりよく聞き、従うのかと言いますと、サタン悪魔の言葉だと言うのです。

Part Four

私自身、両親に育てられ、また親として子育てをしていく中で、一番悩ましいのが、子どもたちが誰の話を一番よく聞くのかということです。

親とか先生とかの言葉よりも、自分と同じくらいの年頃の友達の言うことを最もよく聞くということです。

なぜならば、友達の考えは、大概自分の考えと同じようだからです。

自分がやりたいことの味方になってくれ、自分の考えを後押ししてくれるからです。

それが正しいのか、間違っているのかよりも、誰かが私の味方になってくれるということに勇気をもらうからです。

「親や先生に言うと、どうせ叱られて終わりだ」と思い、「僕は間違っているかもしれない」とは中々思えません。

「だったら、僕の私の言うことに同意してくれる人に話そう」となります。

聖書を見ますと、ソロモンの息子のレハブアムがそうであり、また、神の前にあって私たちもそうなんだと思います。

私たちは、私たちの信仰生活において問題が生じた時、誰と一番多く話すでしょうか？

もしかすると、神を信じていない友人と一番多く話をしてしまうのかもしれませんが。

または、クリスチャンの友人の中から、自分と同じ考えの人とだけ話をするのかもしれませんが。

さらには、自分の味方になってくれる人が現れるまで探し続けてしまいます。

99人が反対しても、一人が味方になってくれたら、それを採択して、事を起こしてしまいます。

そして後で、間違っていたことが判明すると、「あの人がやれと言ったから」

と責任転嫁をしてしまいます。

アダムがそうでした。

「この女が、この女がやれと言ったのです！」と返すと、神様は今度エバに訊きます。

するとエバは、「この蛇が、このサタンがそうするように言ったのです！」と、サタンに責任を押し付けました。

これが、サタンとの戦いです。

Conclusion

すみません。

時間が迫ってきましたので、今日はこの辺でお話を終えたいと思うのですが、最後に、私たちが御霊の剣である神のことばを身に着ける時注意しなければならないことは、聖書が宣言し、約束していること、また聖書がやってはいけないと禁じていること、そのすべてのことを私の生きる基準とし、土台とすること、これが私たちの戦いであることを覚えて終えたいと思います。

私たちの毎日の戦いに、主が、聖霊様がともにして下さいます。

お祈りいたします。

祝祷：御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。